「みる鼻・きく鼻」

（平尾台にまつわるお話）

小倉南区

むかし、正月のことでした。

平尾台に住むみる鼻・きく鼻という二匹の鬼が、英彦山に住む鬼の親分に、何を持っていってお祝いしたらよいかという相談をしていました。

「そうじゃな。ことしは、平尾台名物の針の岩（鍾乳洞の中にツララのようにたれさがっている岩）の刀か、羊の石（羊の形をした石灰石）の置物にしてはどうかな。」といろいろ考えましたが、やっぱり人間の子を持っていくことにきめました。

英彦山の大鬼は、子どもを自分の家来に育てあげ、自分の勢力を広めていたからです。

人間の子でも長い間、鬼といっしょにくらしていると、いつのまにか鬼になってしまうのです。

二匹の鬼は龍ガ鼻から吹上峠をとおり、里の辻へ下りていきました。

里ではとつぜん、鬼が現れたので大さわぎ。みんなおどろきにふるえながら、村中を逃げまわりました。

しかし、二匹の鬼に子どもが一人さらわれてしまいました。そしてあくる日のことです。

「みる鼻・・・何かにおいがせんか。」

「うん。うまそうなにおいが、里からしてくる。・・・何じゃろう。・・・いってみるか。」

二匹の鬼はにおいの正体をみつけようと、また里へおりてきました。

そのようすを見張っていた里の一人が、お寺の鐘をがんがんたたきました。

と、それを合図に、里の人々は、自分の家の門口にくさったイワシの頭をつるし始めました。

鼻や目がよくきく鬼たちは、目がくらみ、声がかれてしまい、あわててすみかに帰りました。

ところが次の日、人間にこらしめられた鬼たちは、こんどは大きな鼻の穴にせんをして、また、里に下りてきて大あばれ。

村人たちは、鬼退治の相談をしました。

さて、そのよくじつの夜のこと、二匹の鬼は鼻にせんをして、また里におりてきました。

里はシーンとして静かでした。

鬼どもは不思議に思って、そろそろと里の広場までやってきて見ると、火があかあかと燃えています。

「ヤッ、ここにいたか。うわあーッ。」

鬼どもは、火のまわりの人間をめざして、おどりこみました。そのときです。

パン・・・パチ、パチ・・・パパン・・・パパン・・・パチ、パチ・・・と大きな火の子があたり一面にふりかかり、ものすごい竹のはじける音がしました。

鬼どもはびっくりぎょうてんして、いちもくさんに山のすみかへと帰っていきました。

その間に、さらわれていた子どもは、里の人の手で助け出されました。

竹の音にこりた鬼どもは、二度と平尾台から里には出なくなったということです。